

## 蘭学とは？

## 蘭学を支えた人びと

江戸時代の洋学は、鎖国体制化の日本にオランダ商館（長崎出島）を通して移植された西洋文化を指している。語学を中心とした諸科学を、当時「蘭学」と呼んだ。

---蘭学の研究対象は広汎多岐にわたるが、およそ次の4分野に大別される-----

オランダ語の習得や研究である語学  
医学、天文学、物理学、化学などの自然科学  
測量術、砲術、製鉄などの諸技術  
西洋史、世界地理、外国事情などの人文科学

幕末には、西洋諸国との交渉から、語学の必要性が高まり、近代国家への思想的基盤ともなった。八代将軍徳川吉宗の関心から、青木昆陽に蘭語学習を命じ、昆陽は「和蘭話訳」（1743年）「和蘭文字略考」（1746頃）等の入門書を著している。京都の山脇東洋は解剖に立会い、所見を「臓志」（1759）に誌し、長崎の本木良意は独人レムメリンの人体解剖模型図を翻訳、後に「和蘭全軀内外分合図」（1772）として刊行される。この風潮の中で杉田玄白や前野良沢は、桂川甫周らとクルムスの解剖図譜「解体新書」（1774）を翻訳出版した。このとき、良沢は「蘭訳筈」（1774）を版行し、のち増補して「和蘭訳筈」（1785）を著した。玄白、良沢の学統をついだ大槻玄沢は、長崎で吉雄耕牛や本木良永に蘭語を学び「蘭学階梯」（1788）等出版、江戸蘭学の指導者となっている。門下の宇田川玄随は「西説内科撰要」（1793）を、その養子玄真は「医範提綱」（1805）を、その子榕菴は、リンネ分類学の「菩多尼阿経」（1822）や、化学の「舍密開宗」（1837）を刊行した。京都の稲村三伯は、ハルマ蘭仏辞典の蘭和原訳から「波留麻和解」（1796）を編集、門下の藤林普山は「和蘭語法解」（1815）を著している。長崎の志筑忠雄は「和蘭詞品考」やニュートン学説の註釈「曆象新書」（1802）、ケンペル日本誌から「鎖国論」を訳出し、蘭学研究の水準を画した。商館長ドゥッフは、自ら蘭和辞典編集に着手し、引き継いだ通詞たちにより「道訳法蘭馬」（1833）が出版され名声を博した。本木正栄らは1808年英鑑フェートン号の長崎不法侵入を契機に、商館のブロンホフの指導で英語学「諳厄利亞興学小筈」（1811）を上梓した。またドゥッフは、露使レザノフの部下が択捉島に侵入して残した仏語文書を翻訳、正栄らはドゥッフ指導の下に仏蘭辞典から仏和の「払郎察辞典」（1814）を編纂している。志筑の高弟馬場佐十郎は、1808年、幕府天文方高橋景保の下で「新訂万国全図」（1810）の翻訳に携わり、蝨書和解御用開設後、シヨメールの辞典翻訳に参加した。たまたま国後島に侵入し捕らえられ松前に抑留中の露艦長ゴローニンとの交渉にあたり、「魯語文法規範」（1813）を編集した。また「和蘭文範摘要」（1814）等を著し幕府内に新学風を築いた。玄白は、晩年「形影夜話」（1810）に、「品こそかわれ治療の理は一ッなるを知る」と若き日の伝統医学批判を恥じて、文化受容のあり方を顧みている。このような経緯の中で、文化・文政期を画期として「蘭学」の体系化・細分化が進み、洋学は近代文化形成への道標となったのである。

西村圭子（日本女子大・史学科教授）